



猫 養 通 信

発行人 東 明 雅
発行所 柏市つくしが丘2-2-12東 明 雅 方
Tel. 0471-75-1192

根を切れ、続きを言うな

東 明 雅

①根を切れ、続きを言うな。
②夜店のステッキを避けよ。
③あるものは付く。ないものは付かぬ。
三十年前、芦丈先生が私に教えて下さった「付け」の心得三箇条のうち、③については、この「ねこみの通信」第三号で説明し、②については第四号で説明した。今度は①の番であるが、これについては芦丈先生が御自身で書き残されたものが、「山棟」第七号に掲載されている。貴重な文献であるので、ここにそのまま引用させていただく。

甘汁 苦汁

芭蕉の俳諧は、前句をよく味わって後句を考えるべきである。前句の時、場所、季節、昼夜、晴雨、寒暖、人であれば、自他、貴賤其他等をよく考え、愛と云う體かな句のあり処を見きわめて、後句の取材や言葉に継らず、放れて付句を求める。此事を「根を切れ」「其続きを云うな」と教えている。

種井淡へる里方の隙

五人八人の里方の人が井淡いをして、鮒が取れたから之を臚につくって、一杯やろうという処である。一句立ちをよくして居るが、大きな根が有って、蕉風の絶対に嫌う付方である。

我ながら今度の世話は仕あてたり

十分に見て戻る祇園会

とく出しておいた團扇のまだつかず嫁か聲かの嫁人をした。思ったよりも佳い家であった。祇園会に招待され、十分の歓待をうけ余すなく見物させて貰って帰った。土産に買ったか貰ったかの団

扇を出しておいたがまだ着かぬ。と其続きと付け進んで居る。是等は芭蕉の俳諧を全然知らぬからのことである。これが当時日本一と云われた、花の本産舎の作であるから驚く。
以上で引用の文は終る。

「種井」と「鮒」とは物付であるが、この付合では、ただ単なる物付というだけでなく、この人達が、井淡いをして、その次は鮒料理をしたと、行動が続いている。ただ単なる物付ならば、芭蕉の作品にも多く用いられ、別に大して問題ではない。種井を淡える行動と料理を作る行動とが、余りにも近い。直接結びついている。そのことがまずいのである。

小学生の作文を読むと、たとえば「私はけさ早く起きました。そして顔を洗いました。それから学校にいきました。」という調子のもが多い。この、そして、それから、の付くような付合は困るのである。

前句と付句との間には、はっきりした断層または距離が必要である。断層・距離のないものを親句と言ひ、あるものを疎句と言ひ、疎句によい句が多いというのは、連歌師心敬の言葉である。根のある親句を避けるよう、我々も心がけねばならない。

花の座

永島靖子

花の座が好きである。連衆の一人である時も、捌き手である時も、匂いの花になるとほっとする。長い旅路の果の安息、付句を案じ続けた疲労が一挙に癒される感じ。式目はうまく出来ていると感じ入ると共に花の句は何より私の性に合うらしい。

俳句と二十余年付合って来て連句の座に連なる時、困ることは数々ある。切字が駄目、二句一章が駄目、日常の事柄を詠まねばならない等々。俳句の場合と全く逆なので、私は大抵困惑しウロウロしている。事柄を見事に切りとった、無季の恋句や時事句がいつも私の頭上を越えてうまく納まって行く。もちろん、日常の万般に眼を開いている要や、連吟の効果等を学び、一句独立の俳句に肥料をという人並の願ひも、連句への敬愛の念も抱いているけれども――
花の句に戻ると、花という語の象徴性が嬉しい。俳句における季語は、写実力よりも象徴力を強く担うものだが、美しいものはないものの究極に在る言葉「花」は、俳句実作に当たってなかなか御し難いもの。それが花の座では、軽やかに、日常性を帯びて納まる。俳句におけるわが象徴性志向と連句の日常性とが、うまく「花」の語を介して手を結ぶのであろう。

巫女二人花の薔の如くにて
これは花の座だから許せるのであって、俳句とは呼ばない。
靖子

警官はいまパトロール中
和子
花の夜の黒犬の毛の艶やかに
靖子
ことなく過ぐる今生の春
隆彬

切字のない詠みようが、左右から支えられて起立している。当分はこういった手掛りから連句を楽しませて頂きたいと思う。

募 集
「猫養作品集Ⅱ」一人一篇。
締切 平成三年十一月末日
送り先 柏市加賀2-12-11
〒二七七 梅田 利子 方
(0471-72-8119)

下鉢 清子

信州大学を退官された明雅先生は、松本市から東葛飾郡の柏市にご転居になった。東葛飾地方は千葉県のチベットの言われ寒さ一入のところであるが、松本の冬の厳寒から比較すれば住み易く、何より都心に近いと言ふことは、連句生活に厚みを増すであろうこと請け合ひである。根津芦丈門の兄弟子大林柚平氏が早速ご訪問になり、歌仙を楽しまれた。

「冬もみち」の巻

明雅居を訪ふ

葛飾に友移り住み冬もみち

狭庭に洩るる小春日の影

客発句、亭主脇句で始まる「冬もみち」

の巻から、柏連句会(当初は葛飾連句会)

が発足となった。昭和五十五年十一月十九

日のことである。以後先生宅を会場に集ま

りを重ねつつ、五十七、五十八年の初懐紙

を王子の扇屋で開くなど活動が固まってい

ったが、先生宅も手狭になったために、柏

市光ヶ丘近隣センターに会場が移された。

私が明雅先生にお目にかかったのは昭和

五十九年、江戸川医師会館で開かれていた

「鶉の会」という、医師を中心とした句会

の席であった。帰途船橋からの東武電車内

で連句のお話を伺い、柏連句会の末座に加

えさせて戴くことになったが、初参加の会

場で先ず度胆を抜かされたのは、先生ご夫

妻が席作りの机運びから、お茶、菓子に至

るまで心を配られ準備されておられること

であった。驚く私に、

「芦丈先生がそうしておられたから、弟

子として僕もそうしている。」

と仰有った言葉が今も耳に鮮しい。私の

連句ノートの一ページは、先生御提案の二

十韻形式で始まり、只管記録することに熱中したが、「恋」の句を促されて大安心、俳句修業が役立つと「猫の恋」を捻出すると、「人の恋」と誓められてがっかりしたのも今は懐しい。常に師の警咳に接することの出来る位置にある柏は、実に贅沢な席である。

変化を持たせようと何回か吟行を加えた。柏には市指定の天然記念物たくりの群生地があり、この吟行会が第一回目で昭和六十一年四月十一日、二回目は昭和六十二年九月二十日、少し足を延ばして秩父毛呂山の袖の里松倉荘へ行く。このご主人は私の俳句仲間、明雅先生著「連句入門」は入手勉強中であつたので、著者がお来荘と感激された。三回目は六十二年十一月十三日、北原白秋旧居の紫烟草舎と手古奈霊堂周辺。この頃は毎月平均四席となる盛況、折角の作品群も自席の作品のみが手書きでノートに残されるだけ、他席の作品は披講聞きっ放しでは残念と、五十嵐謙介氏がワープロで、手作りの作品集に纏めて下さることに

なり、この九月で四十二冊になる。以後柏での全作品が鑑賞できることとなったが、有難い努力奉仕に改めて誌上よりお礼申し上げます。

五月例会には必ず「なんちゃもんちゃの花」が詠み込まれるのも此処の特徴。広池学園の見事な「なんちゃもんちゃ」(学名ひとつばたご)を、教えて下さったのは明雅先生、満開になると雪山が坐ったかと思われるばかりの美しさである。

なんちゃもんちゃの発句 e・t・c
若葉雨なんちゃもんちゃはまだ見頃
なんちゃもんちゃの花のこぼるる大地かな
五雨十雨なんちゃもんちゃの咲きにけり
ほろほろとなんちゃもんちゃの散るも如意 さとる

毎年一回はと考える吟行会、今年はこちらは91国民文化祭を兼ねてご参加を。

連句と私

諏訪 欣二

海難審判法第一条 この法律は、海難審判庁の審判によって海難の原因を明らかにし、以てその発生の防止に寄与することを目的とする。皆様にはちょっと聞き慣れない、見慣れない言葉でございませぬが、最近、新聞紙上を賑わした浦賀水道での潜水艦「なだしお」と第一富士丸との衝突事件で、海難審判という文字が浮かび出ましたことを御記憶のことと思ひます。私は、昭和四十四年に船長をやめて審判官として審判庁に移りました。丁度、ぼりばあ丸沈没のころです。審判官、理事官は、殆どが船舶運の経験者ですが、その経験と知識を生かし、衝突や乗揚、沈没、傷害等の海難の原因探求と防止という壮大な目的に対処し、原因裁決、海技従事者に対する懲戒裁決及び海難関係者に対する勧告裁決により目的達成をはかっております。審判は、完全公開主義の下に機能しておりますので、興味のある方は何時でも傍聴できます。準刑事訴訟法的な手続きで審判が行われております。

船乗り、そして審判官、そんな私が、どうして連句の道になどと思われるかも知れませんが、心と心のやりとりでは連句も審判も心を読むという点では同じのようです。ところで、航海を続けておりますと四季の移り変わりが激しく、季節の使用に戸惑うことがあります。その中で自分の句作りに、また客観写生の俳句が綺麗ごとになり過ぎて独善に流れ、第二芸術とまでひと言わせたことそのものにも割り切れぬものを感じ、行き詰まっておりますところ、昭和五十一年ころ真鍋天魚さんに連句をや

ってみてはと勧められ、関口芭蕉庵でお世話に相成るようになりました。喝采でした。連句ってこんなに素晴らしいものかと。野球でいえば、投手であり、打者であり、捕手であり、野手でもある。もう一ついいことは観客でもあることです。ドームでの野球は賛成できません。青空の下で楽しむ草野球が一番です。連句もその通りだと思ひます。その後縁あって猫養にお世話になり、明雅先生はじめ皆様のお蔭で一段と勉強が進むようになりましたが、壁に行き当たればかりです。先生のおっしゃる余情付けの付心、付味に四苦八苦しております。席につきますと子供のように軽い興奮を覚え、心乱れて八方破れとなり、響くのが遅い自分の鈍さを悔やんでいます。私の歩んで来た人生から、連句を通じての海への郷愁をなんとかものにしたと欲ばっているのですが、過去への単なる郷愁でしかなく前進がありません。この身が、大洋の真只中にありますと、ちっけな自分の姿を見るだけです。林檎の皮よりも薄い空気の層を持った地球は、世界の海は、芭蕉の「荒海」の句につぎるように感じられます。天文学などなかった時代に芭蕉は宇宙を肌で知っていたようですね。海上生活にはこんな喜びもあるのです。乗組員が飼っていた金華鳥に可愛い子の生れたことがありました。

覗くなど春の子抱いて金華鳥 欣二
連句も、武蔵の五輪書ではありませんが、地一基礎、水一克己、火一修練、風一知彼、空一融通無礙で悟りたいと思ひます。つまらぬことを綴らせていただきました。

(下関市在住)

※金華鳥ーオーストラリア原産、大きさは十姉妹ほど、脚と嘴は朱色。

(広辞苑)

電脳連句へのいざない

林 義雄

東先生に初めてお目にかかった時に真っ先にお尋ねを頂いたのは、電脳連句というのはコンピュータに連句を作らせるものなのか、ということでした。確かにこの名には仰せのように解されるふしがあります。この名前を考えた時には、あまり長すぎる名称にならないようにという配慮から四字漢語の形にしたのですが、その実体を正確に表現するならばむしろこれは「電脳通信連句」とでも称すべきものでしょう。

この「電脳通信」、一般には「パソコン（ワープロ）通信」と呼ばれますが、その仕組みは簡単に言うならば一種の伝言板にあたるものと見ることができるといえるでしょう。ある街の広場に大きな伝言板が作られているとします。この伝言板には誰でも自由にメッセージを書く事が許されています。同好会の案内、文芸作品の発表、身辺雑記、政治談義など、初めはさまざまメッセージが雑然と書かれますが、やがて書き込みが多くなるにつれて内容に依りていくつかのコーナーに区分けされてゆきます。こうすれば利用者は関心のあるコーナーに直行してメッセージの読み書きを能率よく行うことができるからです。

実際のパソコン通信では、通信機能を提供したパソコンやワープロを使って電話回線經由による文字データの送受を行います。その際に一般の電話通信のように相手と直接やりとりを交わすのではなく、まず送り手が一つの通信ネットワークの中央にあるコンピュータ（ホストコンピュータ、ホストと略称されます）の記憶装置に一定の手順に従ってメッセージを書き込みます。一方、受け手は自分の都合のいい時間にホ

ストと電話回線を結んでそこに書き込まれたメッセージを自分のパソコンやワープロの画面に表示させます。

こうして情報の送り手と受け手が一つの場を通して時間の制約を受けることなくメッセージのやりとりを行うことができるという点に現実の伝言板とよく似た性質が見られるわけです。

このような通信ネットワークは、狭い地域に住む人々を対象とするものから、日本全国に及ぶものまでさまざまのものがあありますが、全国規模の大手商用ネットワークでは、アクセスポイント（ＡＰ）と呼ばれる支局が全国主要都市に設置されています。このＡＰはホストと回線によって結ばれているので、利用者はホストに直接電話をかける必要はなく、近くのＡＰを利用することでホストとの間の電話回線を確保することができま

す。このように空間の制約を越えることができるというところにも現実の伝言板と似た性質が認められますが、その利用者が全国（場合によっては世界）に広がるという点には両者の比較を絶するものがあります。このような伝言板に似た仕組みを利用して制作する連句を「電脳連句」と称していますが、それが興行されている場所は日本最大規模の商用通信ネットワーク「PCIVAN」の中、「おじさん広場」に設けられた「連句ひろば」というボードです。ここには全国各地に散在する連衆が集まって連日和やかに文芸の制作と文字言語による会話を楽しんでいますが、このような形態の連句興行はこれまでは見られなかったもので、ここにはニューメディアを通じた新しい座の形成を見ることができま

す。皆様もどうぞこのような私どもの座にお出まし下さい。連衆一同お待ち申し上げます。

立機式の御案内

豊田好敬

十二月八日（日）東京深川の芭蕉記念館で、平成三年度 猫養会主催の立機式が行われます。時間は正午より六時まで。立機にあたる方は、秋元正江さん、杉江平郎さん、式田和子さんです。

そもそも、立機式なる言葉を私が耳にしたのは、五年ぐらい前、式田和子さんからでありました。遙か遠い世界の襲名披露のようなものと、そのときは思っていました。ところが、七月の終わりに、突然、東明雅先生から、猫養のお三人の方に立機式をしてあげたいから、あなたに事務局をやってもらいたい、とのお言葉でした。

「私にできるかどうか自信はありませんが、中川哲さんを頭にお願ひして、及ばずながら最善を尽くしてみます」とお引受けした次第です。

お免状と文台の授与から始まる立機式のセレモニーには独特な祝吟もあります。つづく披露宴では正式俳諧興行、祝いの謡、そして、ここから座をワァーッと盛り上げる「破」の二段の隠し玉を、先生は企画していらっしゃるようです。猫養会十年の歴史の中で、立機式という初めてのイベントです。この喜びを共に分かち合うべく、皆さま、ぜひ振るってご参加くださるようご案内申し上げます。

※ 九月二十五日開催された第四回猫養会理事会、第二回猫養同人会理事会において、十二月の立機式につき、実行委員会を設け、実行委員長を中川哲氏、事務局長を豊田好敬氏にお受け頂くこと、又若干名の事務委員を置くこと等決まりました。

◇ 猫養発展基金ご協力感謝いたします。

- 一口 加藤治子 矢崎藍 杉山壽子 橘文子
- 二口 上月淳子
- 三口 杉江杉亭
- 五口 福井隆秀
- 五千元 下鉢清子
- 一万五千元 ニュー東京有志
- 二万円 根津美紗

出版祝賀会のお祝いとして
二千元 加藤道子 野瀬潤子
一万元 電通連句部 四宮会 湘南連句会
ころも連句会 川野夢艸

（敬称略）
尚東明雅先生より、猫養会へ十万円、猫養同人会へ十五万円、又一猫養作品集「へ四万六千円、ご芳情頂きました。

* 連句とさかな *

かわはぎ 杉江杉亭

湯河原に行きつけの小料理屋がある。相模湾活魚料理を看板にした女将と板前の小ていな店である。

黒板に本日の仕入の品が書きこまれている。おや今日はかわはぎが入荷しているな。それなら刺身と煮付できまりと。正一合の冷酒と刺身で飲み始め、肝付の煮付が出される頃には二本目のお酒が届くという次第。至福の一刻である。

（蛇足）

スーバー等でかわはぎと称しているのは大半はうまづらはぎ。為念。

（編集部）

【Q】丈高い句を作るコツをお教え下さい。又、「胴切れ」についても教えて下さい。

（橘 文子「猫養会」）

【A】丈高い句を殊更要求されるのは、第三ですし、「胴切れ」が問題になるのも、第三です。第三を丈高く作るというのは、連歌時代からの伝統で、俳諧でもこの教えが忠実に守られています。

丈高い第三を作るには、まず、杉形・大山・小山という、形を覚えること、これがコツです。

杉形 むら雀日和定むる声立てて
これは「むら雀声立てて」と作って、そのあとで「日和定むる」という中七を入れる方法です。

大山 秋の風鍛冶の銚の通ひ来て

これはまず「鍛冶の銚の通ひ来て」と作り、のちに上五文字「秋の風」を置く方法です。この際「秋風に」とすると、平句的になってしまいます。「秋の風」と切るところに丈高さがあらわれるのです。

小山 落第子口笛を吹く樹によりて

これは「落第子口笛を吹く」と作って、のちに下五文字「樹によりて」を置く方法です。

このように、杉形・大山・小山の三体系を用いれば、丈高い第三を作ることができません。この三体系のいずれを取っても、むら雀・秋の風・落第子というように、上五文字の語尾に助詞などを用いず、他と切り離して作られています。これは第三を二句一章体に近づけ丈高くする方法であるとともに吟声した場合にもよく聞こえるからであります。ただし、芭蕉の七部集を見ても必ずしもこの通りにはなっていませんので、無理に拘泥する必要はありません。

碑や秋風の生む山の音

月見団子を腰にさげゆく

かりんの実籃胎に盛り賞づるらん

房利 正江 元子

春ノ月や木の間は余吾の水明り

帰りし鴨に睡る鴉鳥

藤餅落着きの茶をすすめるて

藤艸 時彦 明雅

次に第三を丈高くする方法として説かれるのが「すみのてにはを切る」ということです。これは簡単に言ってしまうと、一句の中で、余分な助詞をなるべく省くということですが、たとえば、

月高し四阿に酔を醒ましるて
猿釣りの人の傍に猫もゐて
小面の視野の人はみな爽かに
傍点の助詞は省略しても意味がよく分り、また省略することで一句がすっきりします。

さらに「胴切れ」の句を嫌うのも、丈高くする為です。「胴切れ」とは上五・中七・下五という第三の句形と、その句の意味上の切り方が一致しない、いわゆる句割れ・句跨りの現象をおこすことです。例は次の通り。

さざ虫を土産に／学生戻り来て
真昼間の水面に／鳥の騒ぎゐて
茶柱が立てば／何やら嬉しくて

俳諧人物伝 ⑤

下田 実花

杉内 徒司

「三井武夫氏を偲ぶ会」が家の光ビルで昭和五十五年九月五日開かれた折、実花さんは思川会員武翁のエピソードを話された。思川会とは、武原はん経営の六本木の料亭「はん居」を会場とし、会員十名程で高浜年尾の選をうけ、実花さんが世話役をしていた句会だ。

尚、「偲ぶ会」の一部として当日巻いた東明雅捌きの追善俳諧に左の一節がある。お豆腐一丁みそ流しの中 入江たか子振りかへる山を離れて行きし人 下田実花

この会の掃りがけに「お座敷でも三井さんにお目にかかると、やはり歌仙の話になって、私も教えてもらいたいとお願ひした事がありました。」と話された。

こんなやりとりがあったので、そのご入江さんの有楽町のお店「とん亭」で実花さんを正客とする歌仙の会を何回か張興した。立句はいつも実花さんの囁目吟。

実花さんの家は歌舞伎座の裏、「とん亭」からは歩いてゆかれる。ある時途中まで一緒に歩いた折、思い切って連句実作歴を聞いてみた。付には憤れていないと見受けられたからだ。

「鎌倉の虚子先生の捌きでの席で、半歌仙巻くには間あり軒の梅」と申上げたことがありましたが、お世話役で伺ったのでその半歌仙には加わりませんでした。実作は今度が初めてでございます」と答えられた。

「ふみつづり」（57・6月刊）のあとが

きに

「この度永年お世話になりました新橋より身を引くことに致しました。

尚今後廃れましても、今迄通り、俳句は勿論、文章、連句等には勉強し続けて参り度いと思つてをります」とあるが、それからの実花さんは相不変忙しい日が続いた。五十九年十月二十日から銀座の「ギャラリイ四季」で「山口誓子、下田実花俳句展」が開かれたが、その最終日の二十六日に三笠宮が見えられた。若杉という俳号の三笠宮を囲んだ写真が「フォーカス」（12月7日号）に載っている。「宮様にも愛された名妓の死」と題されているが、その夕方倒れられ、三十日逝かれた。弱ある運命に耐えて気丈に生きた実花さんの余生の短かりしを悼む。

編集部より

○「夏の湯上りにビールを飲んで爽快感が胸を吹き抜けるような作品を」と、「新炭俵」にありました。

ビール同様付合も、気が抜けぬ裡に言い留める技術を磨かなければ、と思うこの頃です。

○十一月は千葉で国民文化祭。猫養作品集Ⅱの締切は十一月末日。十二月は立机式関係者の方々お世話様です。

○例年がない不順な天気が続いておりませんが、皆様どうぞご自愛下さいませよう。



季刊「ねこみ」通信 第五号
発行者 猫養連句会
印刷所 アトリエ・ネコ